書評

ベッティーナ・シュタングネト著（香月恵里訳）『エルサレム〈以前〉のアイヒマン――大量殺戮者の平穏な生活』（みすず書房、2021年）

石黒　要
独立行政法人国際協力機構地球環境部

アドルフ・ヒトラーと国民社会主義ドイツ労働者党（ナチ党）に率いられたドイツは、およそ600万人のユダヤ人を第二次世界大戦期に虐殺した。1942年１月のヴァンゼー会議によって、ユダヤ人の絶滅を意味する「ユダヤ人問題の最終解決」が決定されたが、これによって残虐の勢いがさらに増していく。ヴァンゼー会議の議事録には、ヨーロッパのユダヤ人を1,100万と捉えており、これに基づけば、ドイツは半数以上のユダヤ人を虐殺したことになる。このヴァンゼー会議は、15人による高官会議であったが、その出席者のひとりが親衛隊中佐であり、ユダヤ人問題課の長であったアドルフ・アイヒマンであった。1945年５月のドイツ敗戦後、ドイツの戦争犯罪を裁くためのニュルンベルク裁判、それに続くニュルンベルク継続裁判が行なわれたが、これらの場にアイヒマンの姿を見ることはなかった。1960年５月にアイヒマンはエルサレムに姿を現すのである。

本書は、ドイツ語で著された『Eichmann vor Jerusalem: Das unbehelligte Leben eines Massenmörders』（2011年）をドイツ文化の研究者である香月恵里が翻訳を行なって出版された。ちなみにこれに先立って、オランダ語版（2012年）、英語版（2014年）、スペイン語版（2014年）、フランス語版（2016年）、イタリア語版（2017年）、中国語版（2020年）が出版されている。本書は、アイヒマンが逃亡先のアルゼンチンで残した膨大な「アルゼンチン文書」を今一度整理し直して、アイヒマンがアルゼンチンで過ごした日々を描き直すことに重きが置かれている。それによって、もう議論しつくされたように思われる「エルサレムのアイヒマン」との比較を求めるのである。しかし本書は、「ドイツのアイヒマン」の日々、「エルサレムのアイヒマン」の日々も省かず描いており、アイヒマンが国民社会主義とナチ党に関わったきっかけから、その後、ユダヤ人に対する罪と人道に対する罪によってエルサレムで生涯を終えるまでのアイヒマン史でもある。

本書の構成は、序章と終章を除いて、以下の六つの時期に分けてアイヒマンの日々を既存研究、一次資料、インタビューを通して紐解いていく。「私の名は象徴となった」（第一章に相当）――ドイツがヨーロッパのユダヤ人を虐殺する過程において、アイヒマンがこの政策と計画に大きく貢献していた。国外の新聞や雑誌

は、アイヒマンが追放と虐殺の指揮者であることを報じている。アイヒマンは、後ろめたさもなくユダヤ人を追放することや虐殺することにのめり込んでいく。1944年７月にソビエト軍によってポーランドのマイダネク収容所が解放された後でさえもアイヒマンは、ユダヤ人の絶滅を目指すのである。

「幕間劇」（第二章に相当）――ドイツ敗戦後、アイヒマンは戦争犯罪人として追われる身となる。イディッシュ語やヘブライ語に堪能、エルサレムの大ムフティーとの交友という偽りのアイヒマン像が戦時期から流布していたことによって、誰もがアイヒマンが近東に逃亡してしまったと思ったが、束の間をオットー・ヘーニンガーとして、北部ドイツで生きるのである。そして、この流布はやがてアイヒマンが異なる大陸に逃亡することにも役立つこととなる。

「アルゼンチンのアイヒマン」（第三章に相当）――アイヒマンは、リカルド・クレメントとして、オーストリアとイタリアを経由して、1950年７月にアルゼンチンに到着する。ここでアイヒマンは、再び国民社会主義に傾倒するドイツ人と合流するのである。とくに出版社を営んでいたエーバーハルト・フリッチと作家としての地位を固めようとしていたヴィレム・サッセンとの交友は、その後、アイヒマンがこの地で膨大な記録を残すことになったきっかけでもある。国民社会主義に傾倒していたフリッチとサッセンは、アイヒマンが語る世界観に魅了されていく。

「いわゆるサッセン・インタヴュー」（第四章に相当）――1955年以降、ユダヤ人絶滅についての出版物が出始めるようになる。アイヒマンは、これらを敵性出版物であり挑発でしかないと決めつけ、それに対抗するために著述を始めるが、それを自らの好機と捉えたサッセンはアイヒマンにすり寄っていく。サッセンは、アイヒマンの著述に磨きをかけたいため、毎週末の座談会を催して、録音機を密輸してまで記録を残そうとする。座談会のトランスクリプトからは、開放された場であったことが分かるが、それゆえ敵性出版物の内容が正しいことを証明する場にもなっていき、さらにアイヒマンが語る戦時期の包み隠しのない残虐さを受け入れられなくなったサッセンは、自らの企みを終わらせることになる。

「偽りの安全」（第五章に相当）――1957年９月の連邦議会選挙の結果（西ドイツ）は、アルゼンチンの国民社会主義に傾倒していた者たちにもう第三帝国を取り戻せないことを気づかせた。そしてこれを境にしてアイヒマンのアルゼンチンの日々にも斜陽が差し始めるのである。当時、西ドイツの連邦憲法擁護庁や連邦情報庁がアルゼンチンのアイヒマンの行方について多くの情報を持っていたにも関わらず、外務省とドイツ大使館は、彼らとの調整を避けた。アイヒマンを西ドイツに戻せる見込みがないと考えたヘッセン州検事長のフリッツ・バウアーやナチスハンターのサイモン・ヴィーゼンタールは、イスラエルに接触することになる。アイヒマンは、イスラエル情報特務庁（モサド）の工作員によって、1960年

５月にエルサレムに密かに連れ去られるのである。そして、「役の変更」（第六章に相当）において、我々がこれまでによく知るエルサレムの裁判に臨むアイヒマンが現れるのである。

ハンナ・アーレントによる『エルサレムのアイヒマン――悪の陳腐さについての報告』（1963年）は、アイヒマンに関心を持つ者ならいずれ目を通すことになる一冊である。アイヒマン裁判を傍聴したアーレントによるこの一冊をきっかけとして、その後も多くの研究者がアイヒマンの「ありふれた悪」に対して向き合ってきた。アーレントは、アイヒマンをシェイクスピア戯曲で描かれるマクベスやイアーゴーではないとしたが、アイヒマンの想像し難い悪は、彼の無思想性ゆえに生み出されたとして、そのことをアーレントは「陳腐」と表した。アーレントと同じく哲学者である著者は、やはり本書をアーレントとの対話と位置づける。

ところで、アイヒマン裁判では、アルゼンチン文書が証拠書類として用いられることはなかった。アイヒマンがアルゼンチンから突如いなくなり、サッセンはアルゼンチン文書を手元に置いておくことに危険を感じて、アメリカとドイツの雑誌社に売却してしまうからである。これによってアルゼンチン文書が散在することになってしまい、さらに不幸なことにその真偽が問われたからである。本書によって、アイヒマンが逃亡したアルゼンチンにおいても国民社会主義と反ユダヤ主義を貫いていたこと、また戦時期にユダヤ人虐殺に関わったことに少しのためらいもなかったことを知る。それは、当時アーレントが知ることができなかったアイヒマン像である。そしてこれを知れば、学問好きで国際主義を愛するエルサレムでのアイヒマンの姿は、もはや自らの死から逃れようとする苦しい弁明でしかない。

著者は、本書を著すために散在しているアルゼンチン文書の所在について丁寧に調べ上げているが、このような苦労をするのは著者だけで十分であり、これからアルゼンチン文書を研究したい者は、どこに何があるのか、さらにページ索引についても著者に質問すればよいと述べている。これからもアイヒマンの研究が進むことを望む著者の気持ちの表れと捉えたい。最後に著者は、ドイツ連邦情報庁に保管されている「アイヒマンファイル」の取り扱いを批判する。アルゼンチン文書や他の一次資料と並んでアイヒマンファイルは、重要な一次資料であるはずが、ほんのわずかな資料の公開に留まっているのである。連邦情報庁によれば、真実の追及よりも、「国家の安寧」、「情報提供者の保護」、「関係する第三者の一般的人格権」をより重要とみなすからである。今、アイヒマンファイルの公開を望む者は、連邦憲法裁判所や欧州司法裁判所に訴訟を起こすしかない状況を生んでいる。アメリカ中央情報局（CIA）やモサドは、自らのアイヒマンファイルの公開を進めており、著者は最たる当事者のドイツの姿勢を憂慮しており、真実を隠そうとすることによって生じる疑念や邪推のほうが危険な害を及ぼすことを指摘

する。ドイツでは、今も過去のナチ党による犯罪を裁くことは終わっていない。戦争の記憶を遠くにおきたいドイツ国民も多くいるが、それでも現世代と今後の世代は、過去を記憶することに責任を負っているのである。そのためにはいずれの政府であっても、歴史に秘匿性をもたせない努力をし続けなければならない。

原著は、およそ650ページにおよぶ大著であるが、香月理恵による翻訳が優れていることもあり、ドイツ近現代史を専門としない読者も読み進めていくことができるだろう。